



KI.L302

高域ドライバーのダイヤフラムは6.4cm径のアルミ合金製のタンジェンシャルエッジタイプが使われている。500Hz以上を受け持つホーンは金属製でオプションで横に細かいスリットの付いたスラント型音響レンズ KI.L303も用意されていた



KI.LZ433

ネットワークは500Hzのクロスオーバーで、スロープ特性は12dB/octが採用され、インピーダンスは15Ωとなっている。



KI.L406

ウーファの振動板は頂角の深い楕円で軽量のストレートコーンタイプで、ダンパーはベークライト製である。このユニットはセンターにダストキャップが取り付けられていないため、ボイスコイルにダストが入らないようにユニット全体が布製の袋で覆われている。



オイロダイン「KI.L439」のリア部。ホーンドライバーと38cmウーファーが頑強な鉄製アングルの枠に取り付けられている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、日暮にあるビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。

第22回 Klangfilm / Eurodyn

Klangfilm (クラングフィルム)社は SIE MENS によって1928年頃にドイツでシアターシステムを開発する会社として設立された。この頃から世界のシアターシステムの市場はKlangfilmをはじめ、WEや RCAなどがそのテリトリー獲得を争っていたが、第二次世界大戦後は親会社のSIEMENS社に吸収合併される。当時の Klangfilm 社の大型システムとしては、オイロパ、オイロノール、やオイロダインが有名である。

本文/田中伊佐資
製品解説/岡田幸司(アトリエJe-tee代表)
撮影/小林幹彦(彰彰舎)

Eurodyn / KI.L439

1949年頃にフィールド型の KI.L431 が開発された後、1950年代後期に登場したのがKI.L439である。ウーファーとドライバーの振動板は同じながら磁気回路が永久磁石タイプに変更されている。ユニット構成は金属製のショートホーンが付いたホーンドライバーと38cmウーファーからなる2ウェイシステムで、頑強な鉄製アングルの枠に取り付けられていて、2m×2m程度のサイズのバップルに搭載して使用していた



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Klangfilm / Eurodyn



右手前の黒い背が低い真空管が増幅段のEF-12で、奥の大きい真空管が出力管のF2a11である



Telefunken V69

テレフンケンV69は1952年にNWDR(北西ドイツ放送)の中央研究所で開発された放送局用のモノラルアンプで、初期型のV69が5V69-bタイプまであり、モニタースピーカー 0B5、0B5aに内蔵されていた。初期のV69とV69-aタイプまでは整流管EZ-12が使われていたがV69-bタイプより整流管を廃止してダイオード整流となった。また、増幅段は初期型のV69のみEF-12が使われていて、出力管は全てのモデルでF2a11が2本搭載されている



V69のプレート部。V69-aやV69-bではない最初期オリジナルモデルの証



V69のメーター部



V69のリア部

レアなコンビンビでの試聴が実現 最新スピーカーカーにない説得力

アトリエJe-teeの岡田さんから急にお呼びがかかった。

「戦前に作られたクラングフィルム社のスピーカーカーがドイツから入荷。しかもペアともいえるテレフンケンのV69も一箱。多分早く売れちゃうから速攻で来て」

「こういうお誘いがあるのは極めて珍しい。つまりこのコンビを聴ける機会は今後どうはないということだ。」

さつそく駆けつけてみると、クラングフィルムはシンプルながら38cmの2ウェイなのにやたら御々しいなあと感じた。2つのユニットは鉄で組まれたフレームに装着してある。それを額縁のように取り囲んでいるキヤビネットがでかいのだ。これは前のオーナーが作ったらしい。

「壁に埋め込む後開閉型スピーカーカーなので、本当はこれではまた小さいでしよう」と岡田さんは言う。

そもそもドイツが国威発揚のため、威信をかけて作った劇場(会場)用スピーカーカーらしいから、家で安易にボンと鳴らすものではないのだ。

アンプのV69も相当レアで「機械ものが好きなドイツ人だから、こんなにきれいなままで残っていたんだらうね。よくやったよ。うんうんよくやった」と岡田さんはその国民性にまた賞賛を贈っている。

やっぱり聴くならまず「声」でしようということになって、美人シンガーのジュディス・オーウェンがかかる。昔の音源ではなく現代録音で、一気にその実力をはか

つてみる。これが想像を超えて、モダンで新しい音だった。ビンテージ的な時代性は皆無。声になんともいえない芯があり、それは最新スピーカーカーでは得がたい説得力に直結している。

「声」つながりで新しい録音のオペラが続く。やはりよく通る積極的な歌声。単なる2ウェイなどとは見比べてしまったが、遠くへ飛ばすことを主眼にしているのが、かなり広い部屋でもいけるだろう。それだけ聴き手の心に沁み透ってくる音ともいえる。

時代をさかのぼり、ダイナ・ワシントンが熱唱する54年のライブは、声だけでなくトランペットもサクサクと押し出しがよい。ジャズ馬鹿でなく理知的。優秀なモニターのようにならぬセッションをそのまま熱く表現する。装置のキヤラクターで熱く聴かせられるのではない。

ドイツ製ならカラヤン・ベルリン・ワイヴン交響曲5番。戦前のモデルなのになぜとていこうくらい分解能がいい。

「それなら当時、同盟国だった日本のものもいけるのでは」と冗談が飛び出し、越路吹雪の「愛の讃歌」を聴いてみる。これがとにかく大感動ものだった。あの絶唱がビューと一直線に空気を伝播してきた。岡田さんと思わずヴォリュームを上げる。いやあ、いいものを聴いた。もうこんな越路吹雪には一生巡り会えないのかも知れない。